

新しい資本主義とはバブル 次は新しい中世

2021/10/27

慶應義塾大学ビジネススクール

小幡績

アフターコロナなど存在しない

- ただバブルになり
- そして崩壊するだけ
- アフターコロナではなく
- 備えるべきものは
- アフターバブル

既にバブル崩壊は始まった

- 株価が乱高下というものは
- センチメントが恐怖の手前であることの現れ
- Evergrande (恒大) Group がきっかけと言われているが
- 関係ない
- ただのバブル崩壊
-

本質は普通のバブル崩壊

- 不動産
- 中国経済
 - これらは本質ではない
 - むしろ、ほぼ無関係
- それと独立に
- 米国を中心とした世界バブルが崩壊
 - 直接的にはコロナバブルの崩壊
 - 本質はこれまで先送りされ続けてきたバブルの総崩壊
- バブル総決算
- つまり、バブル大崩壊

それと別に

中国不動産バブルが崩壊するだけ

- 2つのバブルが、別個に、しかし同時に崩壊する
- 最悪のシナリオ
- 世界全体が同時にバブル崩壊
- しかも、二大中心地が同時に崩壊
- リーマンショックよりも遥かに大きなバブル大崩壊
- 今度こそ、大恐慌と比べうるバブル崩壊の可能性

と言っではみたものの

- 米国バブル崩壊は
- とりあえず、株式バブル崩壊に過ぎない
- その意味では軽微
 - リーマンよりも軽い
 - テックバブルよりは遥かに深刻

バブル崩壊の理由は

- 米国金利上昇
- 背景にはインフレ加速
- ただ、インフレ自体はそれほど大きな問題にはならないだろう
 - スタグフレーションは大きな問題ではない
 - 軽いスタグフレーション
 - ただし、これは世界的に久しぶりの現象なので、戸惑い、混乱があるだけ
- すべての原因は米国金利上昇、そしてドル高
- 低金利バブルの崩壊という、典型的なバブル崩壊

先進国不動産バブルも崩壊する

- 金利上昇からのリスク資産バブル崩壊
- 不動産も株も同じこと
 - バブルになっている理由が低金利で共通だから
 - ともに崩壊する

しかし、金融システムは壊れない

- リーマン後、手当てされている
- 世界的に銀行システムは万全ではないが、脆弱ではない
- 過剰債務問題は、銀行システム側、債権者の危機ではなく、債務者の危機として現れる
- そのエクスポージャーが大きい債権者、銀行はやられるが
- システム全体は揺るがない

弱いところがやられていく

- 先進国よりも新興国
- さらに深刻なのは途上国
- 各国内では
 - 低所得者層、貧困層へのダメージ
- マクロ経済、金融システムの危機は軽微で乗り切れる
 - しかし、弱いところは壊れていく
- 格差バブル崩壊
 - バブルで儲かった人々はそれほど傷つかず
 - バブルの直接の恩恵がなかった人々、国々がやられる
- 普通の格差問題

途上国

- 通貨は先進国が強いまま
 - ドルが一番強く
 - ユーロもドルよりは弱いが強く
 - ドルの借り入れの多い国がやられていく
- 資源国はインフレ懸念で一時的にはよいが、
- 米国および先進国の今後の不況で、その後はやられていく

新興国

- その国次第
- ドル高でドル借り入れの分はやられるが
- その国の財政が健全で
- 産業がそれなりに強ければ
- 乗り切れる

日本

- ヤバい。
- 円安が一番恐怖のシナリオ
- そして、その気配が既にある

今回、最も脆弱なセクターは？

- 政府
- 中央銀行
 - ともに債務まみれ
 - ここが最後にはやられる
 - そうなった時が、バブル総決算、総バブル大崩壊
 - このときには、大恐慌と比べ得る世界バブル崩壊
- 真のアフターバブル

現在のリスク資産バブル崩壊後、 その次が問題

- 世界的な政府財政破綻、中央銀行破綻
- この時への準備、その時の対応が雌雄を決する
- 日本は一番ヤバい状況
 - 政府負債が膨大
 - 日銀の国債保有量
- 対応にも失敗しそうだ
 - 政治力、国民世論力が最低レベル

一方、実体経済そのものは健全

- 日本の唯一の望み

中国不動産バブル崩壊は必至

- バブルである以上、いつかは崩壊する
- バブルであることは明白
- 問題は、なぜ今か？
- とことん崩壊するか？
- 政府により救済されるのではないか？
- この3つが問題

今？

- Yes

- すでにevergrandeが破綻しているということは、ついに始まった、ということ
 - リーマンショックでも。まずサブプライムローンの破綻が相次いだのが2006年、それがパリバショックという債券市場の破綻が明確になったのが2007年、2008年3月米国投資銀行ベアー・スターンズ破綻
- ベアー・スターンズの破綻に近い段階
- 今後、不動産企業の破綻が相次ぐだろう

とことんかどうかは銀行次第

- 中国の銀行セクターはどうか？
 - 一般には、銀行セクターは不動産セクターに比して巨大
 - Evergrande も銀行借入れ自体がそれほど大きくない
 - 個人からの資金調達が多い、それで中国国民個人が一番騒いでいる
 - ドル建ての借入れが多いわけでもない
 - したがって、evergrandeが破綻しても
 - 他の不動産企業が次々破綻しても
- 銀行システム危機にはならない
- これが欧米エコノミスト、アナリストの見立て

投資市場の願望に過ぎない

- 彼らの分析よりは深刻に受け止める必要がある
- リーマンショック前も
 - 彼らは常に楽観的
 - サブプライムは限定的
 - セクターがそれほど大きくない
 - すべて破綻したとしても、プライム市場は大丈夫
 - 2006年もサブプライム処理は順調に進むだろうという見立て
 - 2007年パリバショックでも 外向きには
 - 不動産証券化市場はやばい
 - ただここがやられても、金融市場全体への影響は限定的

リーマンショック直前ですら

- 米国政府が救済しないはずはない
 - 合理的でない
 - だから、リーマンが破綻したとしても、全体は大丈夫

しかし、これらは全て間違っていた

- 今回も同じ
- 不動産セクターだけでも
- 不動産開発企業、地方の国有金融機関、省政府
 - 三位一体
 - 習近平の指示を満たすため、各政府は経済に対して無理をする
 - 経済拡大のために政治ができるのは不動産開発
 - カネさえつければよい: 金融機関を動員
 - 不動産破綻の影響は予想よりも遥かに大きく広がる

習近平は合理的かつ力がある

- しかし、合理的だからこそ
- 欧米投資家の都合とは別の論理で動く
 - 彼の目的は金融市場を救うことではない
 - ましてや世界経済、世界金融市場がどうなろうと知ったことではない
- 国内政治問題が格差なら
 - 不動産市場バブルは崩壊しても構わない
 - 実体経済はできるだけ守ろうとするが

経済対策でも欧米と違う

- 一時的な景気は気にしない
 - 次の選挙はない
- 長期の成長優先
 - 世界バブルが崩壊するならなおのこと、チャンス
 - 短期を犠牲にしても長期を追う
 - むしろ不動産セクターを無理に軟着陸させるよりも、その先の発展がある道を選ぶはず
 - それならバブルは破綻させるはず

中国事情通も信用できない

- すぐに権力闘争の問題に落とし込む
 - 習近平の政敵だからつぶされているだけ
 - Evergrandeは例外
 - 誰と誰が云々
- たとえそうだったとしても
- 大局には関係ない
 - 不動産セクターを整理する
 - どの不動産会社、誰を犠牲に理するかは政治的都合だが
 - セクター全体として整理することは変わらない

したがって

- 中国不動産バブルは崩壊
- 実体経済も大きな影響を受ける

私の2021年7月末時点のスライドでは...

- バブルになる
 - 株式市場は既にバブル
 - むしろ、いつ崩壊するかが焦点
 - 不動産市場
 - バブルだが
 - 株式市場の崩壊とともに崩壊するだろう
 - 米国は住宅ブーム:金利低下で投資意欲旺盛
 - 日本以外の住宅投資の大半は投資需要(自宅は改装需要)
 - したがって、金利上昇に極めて敏感

バブルがやってくる(来た)

- 実体経済もバブル
 - 株式市場はバブル
 - しかし、実体経済は大不況
 - 株式市場はおかしい、いつかギャップが崩れる
 - というが
 - 嘘
 - 実体経済が不況という認識が間違っている
 - リーマンショックを超える不況
 - 戦後最大の不況
 - 人類史上最大の危機
 - 前代未聞の今までと違う形の不況
 - 全部嘘

コロナショックは小さな不況

- 瞬間風速最大
- しかし、需要減少量の総額は最小
 - その後はV字回復
 - V字でなく、L字とかいろいろ言うが、いずれにせよ、不況は終了、もう終わった
 - 待機需要が出てくる
 - 需要喚起策は不要
 - むしろ過熱
 - 米国はすでに過熱 世界的な需要急増で半導体不足
 - 欧州、日本は目立たないが過熱

まれに見る単純な不況

- 需要が瞬間蒸発した
 - それにパニックになっているが
- しかし、それだけ
- ストックはまったく傷んでいない
 - 東日本大震災と違い
 - 復興には何もいない
 - 橋も鉄道も農地も すべて前のまま
 - マインドだけが壊れただけ 戻ればすぐにすべて使える
 - しかも、それは妄想
 - 支持率を上げて、経済を支えるマインドを壊した、知事たち

銀行セクターが無傷

- 直接的には何も傷んでいない
 - ただし、今後、中小企業そしてANA、百貨店が破綻すれば、影響はあるが
 - しかし、ANA以外は弱いところから潰れていくだけ
 - 弱くて小さいところが倒産、廃業
 - 飲食、観光だが
 - 飲食はいつも潰れる
 - 5年後に廃業するところが早まっただけ
 - 政府保証なので、負担はすべて政府に
 - 政府による家賃補助: 不動産オーナーを助けるだけ
 - 飲食店はすぐに退去し廃業すればよいだけのこと

世界的な不況は既に終わった

- 中国急回復
- 米国過熱
- 欧米も回復
 - IMFも誤りを認める
 - なぜ、過大評価したか？
 - 欧米が震源地だったから
 - 彼らも逆境に弱い
- 日本も回復
 - 過熱気味 米国ほどではないが

普通の格差問題に戻る

- 貧しい人ほど対応困難
 - さらに貧しくなり、転職もできない
- 後進国ほど危機
 - コロナの死者はコロナによるものではなく、医療体制の社会的な不備による
 - 医療体制の不十分な途上国、駄目な新興国がやられている
 - 財政出動しすぎで、通貨安、インフレで、財務基盤の弱い国が打撃
- まさにいつもの話
- Nothing New

バブルは本当に崩壊するのか？

- 短期バブルは100%
- 中期バブルも100%
- 長期バブルは不明
 - 主観的には、確率は低いと考えるが
 - 方向性は必ず縮小へ
 - 短期バブルのように華々しく崩壊はしないが
- 短期、中期、長期のバブルとは何か？

3つのバブル循環

- 景気循環と同じこと
 - 景気循環の波は4つの波
 - キチン、ジュグラー、クズネッツ、コンドラチェフ
- 短期バブル循環
 - 資産市場バブル
 - 流動性バブル
- 中期バブル循環
 - 実体経済バブル
 - フロンティアバブル: 投資ブーム、新興市場ブーム
- 長期バブル循環
 - 社会バブル
 - 外部の登場
 - 新世界の発見

短期バブル循環

- 現在は、量的緩和バブルからのコロナバブル
 - リーマンショックによる世界金融バブル崩壊を救済するために作られたバブル
 - その世界金融バブルはエンロンショック、同時多発テロによる米国バブル崩壊を救済するために作られた
 - その前はITバブル
 - ITバブルの前から根拠なき熱狂が起きていた
 - グリーンスパンバブル、ブラックマンデーからの恐怖感から抜け出すためのバブル
- これらの短期バブル循環が中期バブル循環を構成する

中期バブル循環

- 1990年の冷戦終了が現在の中期循環の始まり
 - 実体経済バブル開始
 - 社会主義経済が市場経済へ転換
 - 移行経済バブル
 - 貿易相手としても
 - 実物投資先、金融投資先としても
 - 投資銀行が国営企業の民営化オークションで大儲け
 - 新興経済バブルへ波及

バブルの三要素

- 流動化
- フロンティア
- 外部の存在

流動化

- バブルの本質
 - バブルとは流動化したものが群れること
- したがって、銀行融資、株式会社、株式市場、中央銀行の流動性供給
 - これらがバブルの源
 - とりわけ短期バブルはこれがすべて

フロンティア

- 流動化されたものが群がる対象が必要
- 同時にパイが拡大しないと実体経済は膨らまない
 - ここが流動性だけで膨らむ短期バブルとの違い
 - 短期バブルは何も変わらなくても、一つの資産に群がればバブルが生まれる
- 市場化されていないものが市場経済に取り込まれること
 - 外部に似ているが、外部でなくても、周辺が拡大していけばよい
 - だから、断絶、革命がなくても起きる
 - 広がればよい
 - 広がる先があるということ
- 冷戦の終了でフロンティアが拡大した
 - 19世紀後半の米国西部開拓：鉄道も同種の出来事
 - 日本の高度成長、中国の1990-2003年までの沿岸部と内陸：
 - 二重構造の継続的な解消

外部

- これは決定的
- 外部が登場すると
 - 内部が膨らむ
- 異質なものを交換する機会
 - 貿易
 - 投資
 - 略奪
 - 刺激
- 1492年
 - すべてが始まった(ジャック・アタリ)
 - 大航海時代で「新」世界の「発見」

長期バブル循環

- 現在のものは1492年以降：大航海時代から
- 近代資本主義が長期バブル循環
 - 長期バブル循環が終わるとは
 - 近代資本主義が終わるということ
- 資本主義の終わり？
- とは？ どういう意味？

近代資本主義の終わり

- 資本主義の終わりではない
 - 定義の問題だが
 - 資本主義は:5000年以上前から
 - 交換さえあれば、資本主義は始まりうる
 - 交換による利益の蓄積(交換による搾取?)
 - 岩井克人
- 近代資本主義の終わりとは？
 - 中世の始まり
 - 新しい中世

近代資本主義の終わりとは？

- すべてを流動化するという経済システムの終了
 - 流動化から固定化へ
- すべてのもものが固定化される
 - 株式上場志向からMBO、ヴェンチャーキャピタル、ファンド志向
 - ファンド、機関投資家で十分、インナーサークルで
 - 最後の出口だけ上場化して押し付ける
 - プラットフォームビジネス
 - ビジネス覇権の固定化志向
 - 武力による国境変更の停止：国境は動かない
 - 独立運動の終了(1970年代で)
 - 最後の流動化は社会主義体制の崩壊
 - 階級の再固定化
 - 格差の固定化
 - 日常生活
 - スローライフ、ノマドから巣籠もり？

長期バブル循環が終わる兆候

- 近代資本主義が終焉に向かっている兆候はあらゆるところに
 - これが断末魔か、このプロセスが100年続くかはわからないが
- しかし、近代資本主義とは高々500年
 - 人類文化の数万年の歴史からすれば、ほんの一部
 - 続いても終わってもおかしくないが
 - 人類史上いつもそうだったわけではない
 - 例外的な期間

米国の覇権の終了

- 歴史の例外といえ、米国の覇権というのも歴史的には例外中の例外的な事件
- したがって、今、覇権を失うのではなく自ら放棄
 - それが普通で自然
 - 米国は基本的に孤立主義
 - 覇権を握っていたのは高々100年未満
 - はっきりとした覇権は1945-2000:50年余り
- 中国が覇権を握る？
 - 私はそう思うが
 - 5000年以上アジア世界では覇権を握ってきた
 - 米国よりも世界の覇権を握るのは自然なこと
 - そうでないとしても、いわゆるG0の世界(リーダーのない世界:イアン・ブレマー)

近代資本主義が終わると？次は？

- 高度な安定経済
 - 必需品だけの世界
 - ぜいたく品消費の世界の終了
 - かつての中世の22世紀版
 - 膨張、崩壊、蓄積の循環だから自然なこと
 - 蓄積の時代に

近代資本主義とは経済成長の連続だった

- しかし、その経済成長はどこから？
 - 景気循環がある中で
 - 経済成長を続けてきた
 - 基本的に右上がりの世界
 - これに追隨して資産市場も右上がりに
 - 昨今は資産市場が先走り、自己実現バブルに
 - これも近代資本主義の終焉のサイン

3つの誤った経済成長と 1つの真の経済成長

- 1 景気拡大の継続を経済成長と誤解
 - 景気も成長もGDPという同じ指標を使っていることから人々は混同
 - いかなる意味でも誤り
 - エコノミスト、学者の責任は重い
- 2 量的拡大を経済成長と呼ぶ
 - 誤りだが
 - 経済学としては正統派
 - 景気循環は需要サイドの議論(例:ケインズ経済学(ケインズ自身のものではなく、いわゆるISLM))
 - 経済成長は供給サイドの議論
 - 別々の伝統で戦後発展
 - 近年統合が図られてきたが成功していない

量的拡大の経済成長

- 労働投入量、資本投下量の増大による生産増加
 - 必然的にGDPは増大する
 - しかし、単なる膨張、拡大
 - 1990年代後半の東アジアの急成長、アジアの奇跡、1960年代の日本の高度成長は資本の投下に過ぎないと批判された
 - 確かに、その後、量の投入の継続により、成長を持続させようとして
 - 日本も東アジアも日本の1980年代のバブル、アジアは90年代後半のバブルとなり、ともに崩壊した

全要素生産性

- 3つ目の経済成長は
 - 労働投入でも資本投下でも説明できないGDPの増大
 - これこそ真の経済成長と経済学は位置づけた
 - 質的な経済成長？
 - しかし
 - テクニカルには、単なる回帰分析の残差に過ぎない
 - 経済理論で説明できない部分
 - 労働、資本の投入で説明できないから
 - それを生産性の上昇と決め付けた
 - これを「全要素生産性」の上昇と呼んだ

新しい成長論

- ただし1980年代、90年代の議論
- 経済学者はこれの要因を議論しあった
 - そのひとつの例が知識
 - 新しい成長論
 - 1980年代から ポールローマー
 - 知識が直接に成長を生み出す
 - ではその知識はどこから？

知識はどこから？

- 知識
 - 交通、交流
 - 沿岸部だけが成長できる(サックス:海岸からの距離)
 - ボリビアのアドバイザーの経験から
- 社会資本
 - ソーシャルキャピタル
 - 何か？
 - 信頼、社会、文化、価値観
 - 宗教、言語、民族分裂
 - 法制度、法律体系、裁判所
- 民主主義
 - 民主主義の度合いが高いほど成長(バロー)
- アングロサクソン国家、植民地ほど成長
 - コモンロー？
- 百花繚乱というより死屍累々

イノベーションとの出会い

- 全要素生産性をイノベーションと呼ぶようになった
 - いつの間にか
 - 人々は置き換えてしまった
 - 経済成長が必要 ⇒
 - 全要素生産性の上昇 ⇒
 - イノベーション ⇒
 - シュンペーター ⇒
 - 創造的破壊と新結合
- これは間違い
 - 私の見解は...(学会では無視されているが...)

イノベーションでは成長できない

- イノベーション
 - 人々がイノベーションと呼んでいるものは、実は
 - 独占的利益の獲得に成功した目新しいビジネスモデルのこと
 - だから、弁当のしょうゆがどこからでも切れるのはイノベーションではないし、スイカの発明もイノベーションではない
 - それほど儲かっていない
 - 消費者の利便性の向上に比して、儲けは小さい
 - GAFA
 - 単なる独占的利益の獲得、その固定化への成功
 - マイクロソフト
 - イノベーションを固定化して、独占的利潤を獲得した、もはやイノベイティブではないといわれるが
 - 後半部分があってこそイノベーション

つまりイノベーションとは覇権交代に 過ぎない

- パイが拡大するとは限らない
- 独占的利潤を破壊し、活力を取り戻すのが、
シュンペーターの創造的破壊
 - その後に固定化してしまってもはイノベーションで
はない
 - 単なる独占者の交代

本当の経済成長とは？

- マルサスのいう経済成長
- 人口の増加
 - 農業生産力の拡大
 - 一人当たりの消費量は変わらない
 - 食っていただけだから
 - その結果 維持可能な人口が増える
 - 人口とは？
 - 労働者であり消費者
 - 労働は供給力 消費は需要
 - 需要と供給がバランスよく成長
- 経済の拡大

何が違うか？

- マルサスの成長
 - 経済全体での必需品の生産の拡大
- 近代資本主義
 - 必需品を置き去りにし、ぜいたく品の消費増加、生産増加
 - 次々に目新しいぜいたく品を生み出して、それを消費させる
 - 必要ないものを消費させるから、金持ちであれば、必要消費額と無関係にどこまでも消費させられる
 - これが経済成長
 - 経済成長がどこからくるか？という問題の解決策が
 - ぜいたく品の消費：蓄積した富を吐き出すこと

先ほどの「イノベーション」

- イノベーションとは
 - 目新しいものを生み出して
 - ぜいたく品Aからぜいたく品Bに乗り換えさせること
 - 必需品は置き去り
- イノベーションによる経済成長とは？
 - 経済全体でぜいたく品の消費総量を拡大すること
 - ぜいたく品AからZに加えて、ぜいたく品 $\alpha\beta\gamma\dots$ を増やしていく
 - 必需品への労働投入、資源投入は減る
 - 必需品の生産は減るか質的に劣化する
- ぜいたく品を消費するのは誰？
- それを造るためのリソースはどこから？

恋愛と贅沢と資本主義

- ゾンバルトの著作(1913)
 - 富を蓄積した、王と貴族が恋愛のために浪費をすることで、資本主義はテイクオフした、という議論
 - 宮廷で愛人のためにパーティを開き、愛人を着飾らせて見せびらかしあう
 - 壮大な贅沢
 - マリーアントワネットとヴェルサイユ宮殿

恋愛と贅沢が 近代資本主義をテイクオフさせる

- 小幡の解釈
 - 資本主義の始まり、長期の経済成長の始まりには、生産力の上昇だけでは足りない
 - これまでの繰り返しではない、新しい需要の投入が、循環経済の外から注入されることが必要
 - 安定的な循環(自給自足)からのテイクオフには贅沢が必要
 - 1492年以降の流動化、新世界の発見が刺激になる

しかし、浪費した富はどこから？

- 王や貴族はどうやって富を貯めたか？
 - 中世の農業生産力の上昇
 - 領主がこれを収奪
 - 蓄積
 - 支出先がなかった
 - 1492年以降、これが一気に流動化

すなわち真の経済成長は流動化しないことにより生まれる

- 欧州なら中世の蓄積
- 日本なら江戸時代の開墾、農業生産性の上昇
- 流動化はそれを花開かせるだけ

経済成長は格差から生まれる

- 格差の四段階論
- 第一段階：生産の果実による格差蓄積
 - 中世では地主（王侯貴族、領主）が農民から収奪
 - 農業生産力の上昇の果実が地主に溜まる（王侯は地主から収奪）
- 第二段階：消費による格差開花
 - 宮廷での宴会、贅沢
 - これが近代
 - 富の格差が「幸福」（欲望の充実度）の格差として拡大

格差拡大の四段階論

- 第三段階：イノベーション
 - －さらに格差を質的に拡大
 - －手に入れられるものが高性能、豪華に
 - －技術革新がぜいたく品に向かえば、格差は質的にもさらに拡大
- 第四段階：金融資本主義
 - －蓄積(富)そのものを増殖させる
 - －富めるものはより富む

格差拡大のプロセス

- 固定化されたものが流動化し、再度固定化する
- 第一段階で格差固定化
- 第二段階で流動化
- 第三段階：流動化しながら固定化に向かう
- 第四段階：固定化された枠組みの中で流動化してさらに固定化する
- 拡大の原動力は流動性
- 流動性を利用して固定化する

経済成長とはバブル

- 流動化による経済成長とはつまりバブル
 - 流動化し、ぜいたく品の消費を拡大し続ける
- 真の経済成長はその対極
 - 地道な蓄積、改善、コストカット
 - 1:コストカット
 - 確実に消費者にプラスになる
 - これまでよりも必需品の入手が容易になる
 - 2:改善
 - 同じものを同じ様に消費するが、良くなっていれば、より幸せになる、生活が豊かになる
 - 3:自給自足の高度化
 - 自分がほしいものを作って、あまったものをおすそ分け
 - 売るために作ったものではないので、本当に良いもの、必要なものが拡大生産される

近代資本主義と短期、中期バブルとは 相似形

- 膨張も終焉も構造は同じ
- 短期バブルでも中期バブルでも
 - 蓄積があって
 - 技術進歩(供給サイド)
 - 新しい生活スタイル(需要)
 - これにともなう経済の拡大
 - 開花(経済拡大、バブルの始まり)
 - 必需品の変化、更新、拡大
 - 百花繚乱
 - 新しい必需品をぜいたく品とし競い合う
 - 爛熟(狂喜乱舞)
 - 必需品とは無縁のぜいたく品の乱発
 - 腐敗、崩壊

必需品の変化、更新、拡大

- 現代はこれを賞賛する時代
 - 近代経済社会の始まりもそうだった
 - 20世紀の大量消費社会の始まり
- 例
 - 三種の神器(冷蔵庫、洗濯機、白黒テレビ)
 - 新三種の神器(自家用車、カラーテレビ、エアコン)
 - 携帯電話、パソコン、インターネット、スマートフォン
 - 恋愛結婚、不倫？
 - 学歴
 - ファッション
 - 娯楽
 - クリスマスプレゼント、バレンタイン、ハロウィン、オリンピック
 - 核家族での持ち家

必需品が増えることで経済は持続的に拡大

- これこそが経済成長
- しかし、良い経済成長と悪い経済成長
- 正しい経済成長と間違った経済成長
- これが混在し、混同されている
 - スマホ
 - 緊急連絡、メール、仕事:新しい必需品
 - LINE,ほかのSNS:依然ぜいたく品しかし、人々には必需品と思われる
 - ゲームの価値の変化(漫才ブーム、吉本の必需品化も同様):ぜいたく品(無駄)という人々の認識だが、実態は必需品化(なしでは生きられない)
 - 麻薬と呼んでもいいが

麻薬が麻薬でなくなる

- これがバブル崩壊局面の前半
 - 現代社会：ほとんどが麻薬
 - 20世紀、21世紀と麻薬的なものが増えている
 - あきらかにぜいたく品なのに必需品となってしまう
 - 中毒性があるが
 - 実は、現代社会の消費のほとんどがそうかも
 - 地位、名声、コミュニティ、友達からの承認

アベノミクスの経済成長

- すべてバブル
- ほとんどは、景気拡大の持続
 - 金融緩和、流動性の拡大
- 成長戦略も
 - 一億総活躍、女性活躍
 - 海外からの投資呼び込み
 - 単なる量的な労働、資本投入の増加
- どちらもバブルになる

観光は持続しない

- 観光は自給自足プラスアルファとしてしか使えない
- 観光メインでは持続しない
 - 観光
 - ぜいたく品
 - 一度の体験で終わり
 - GOTOも一度きり
- 持続的ではない
 - 観光による成長戦略は短期的なバブルでしかない
- 京都、パリ
 - 観光がメインでない、文化、日常が観光資源になっている
- 観光のための観光資源はすぐに飽きられる

短期バブル循環が必ず終了する理由

- バブル・アフターバブル
 - つまり、アフターバブルの処理を先送りするためにバブルが作られ続けてきた
 - これが短期バブル循環の繰り返しになってきた
 - 1990年以降はまさにそうだった
 - アベノミクスもまさにそれ
 - いまだに1990年のバブル崩壊の後遺症をごまかすための景気拡大戦略
- これがついに終わる
 - 金融はアベノミクスで出し尽くした
 - コロナ対策で財政は出し尽くした
 - もう救済手段がない
 - コロナバブル崩壊の処理を先送りはできない

つまり、次は財政破綻

- 今回のショック
 - 銀行に負担はない
 - すべての負担は、政府財政に
 - 財政破綻しかない

どういふシナリオで財政破綻

- 個人的予想は
- 2023年 黒田総裁交代で日銀の金融政策に疑念が生まれ、国債市場が混乱、海外から円売り、株売りを浴びせられ、円安を止めるために、金融緩和拡大ができなくなり行き詰る
- ほかのシナリオ
 - 新型コロナの更なる新型、あるいは別のウイルス
 - 今回、日本は軽症、次はもっと重症かも
 - この軽症でも財政フル出動、次の重症では、もちろん、コロナ対策を上回る財政出動を求められ
 - 財政破綻、もしくは、出動を拒否して政権が倒れ、次の政権がバラまきを行い、財政破綻

新しい資本主義とは？

- ESG,SDGs これが新しいバブル
- 平泉信之説
 - 正しい
- 新しい資本主義というのもバブル
 - 中身が空 か せいぜいバブル
- 最後のバブルかもしれない
 - 岸田政権はともかく
 - 世界的にも最後のバブル

ESG SDGs バブル

- 資本主義そのものを否定する資本主義
- それが新しい資本主義であり
- ESGバブル
- 資本主義とはそもそも持続可能でない
 - もし資本主義をさらに膨張させるために、環境破壊が土台を壊さないように、環境を破壊しない、という制約条件を加えるだけなら
 - それは新しくもなんともない
 - ただの資本主義

資本主義とは流動化

- 流動化して動員する
 - それがバブル
- それが環境制約にぶち当たったとすれば
- バブルは弾けるしかない
- バブルとは
 - 外から注入して膨らませたもの
 - バブルを維持するには、膨らませ続けるしかない
 - 安定的に同じ大きさでいることはできない
 - それを否定したのがバブル(かつ資本主義)だから
 - 中世という循環社会、循環経済

分厚い中間層

- 底辺層を中間層まで引き上げるということ
 - 富裕層を中間層に落とすことではない(ようだ)
- ということは
- 低所得層もぜいたく品の世界に動員すること
 - まさに資本主義でありバブル
- BOP、アフリカの資本主義市場化も同じこと
- 新しい資本主義とは
 - 最後の資本主義、資本主義の断末魔ということ

持続可能な社会とは？

- 新しい中世 のこと
- 中世の社会階級の固定化は戻ってこない
 - 別の意味での固定化
 - 一旦、資本主義で流動化、革命で流動化してしまった
- 民主主義革命とは
 - 民主主義バブル
 - 流動化して動員
 - メディア政治、ポピュリズム

中世的な循環社会

- 高度な自給自足社会
- 格差社会から 差を意識しない社会へ
 - 他人がどうであっても自分が幸せなら良い
- 権力もマネーも力でなくなる
- 新しい権力が生まれるはず
 - まだ何かはわからないが

資本主義社会

- 差別化、だから格差 富、所得がすべての差となる
- アイデンティティが富
- 皆が同じ富を争う
- 中間層を分厚く:そこから抜け出す競争がより激しくなるだけ
- 低所得者と中間層にして資本主義バブルを膨らませ、彼らをより不幸にする
- 中央集権化、都市化
 - バブル:権力とカネの力の逆転を起こした
 - 新しい中世はさらに何らかの逆転が起こるか？

参考資料

- アフターバブル（2020年9月、東洋経済）
- 東洋経済オンラインの各種記事
 - https://toyokeizai.net/list/author/%E5%B0%8F%E5%B9%A1_%E7%B8%BE
- ニューズウィーク日本版の記事
 - <https://www.newsweekjapan.jp/obata/>